

視野を広げれば
夢が見えてくることを
伝えていきたい

指宿市池田にある池田診療所。所長の宮田敬博さんは、医師として南極観測隊に2度にわたり参加。現在は医師を目指した頃からの夢でもあった地域医療の現場に身を置きながら、南極での経験を生かした講演も行っている。かごしま地域塾推進事業の一つ、「かごしま子どもリーダー塾」でも講師を務め、強く願えば目の前に広い世界が待っていることを子どもたちに伝えていく。そんな宮田さんが持つ、仕事や夢に対する思いを伺った。

池田診療所 所長

みやた たかひろ
宮田 敬博さん

Takahiro Miyata

地域医療を目指した きつかけは何ですか

父が池田診療所で医師として働いていたのが地域医療に興味を持った大きなきっかけですね。「医者はやりがいがあっていいぞ」といつも父が言っていたので、同じ道を選んだのは私にとってごく自然なことでした。医師になってから10年ほどは、県外の病院で救急医療に携わっていました。でも、いつかは地域医療に関わりたいという思いは常に持っていましたね。父の跡を継ぐ形で平成13年に鹿児島島へ戻り、平成18年から所長として充実した日々を送っています。



当診療所に来られる患者さんの約半数が75歳以上。診察はもちろんです。年配の患者さんたちに安心感を与えるのも大切な仕事です。医者が何人もいる病院とは違い、ここに私の代わりはいませんから責任やプレッシャーも小さくありません。しかし、それだけ必

要とされていることがやる気を高めているのも確かだと思えます。

南極観測隊での経験が もたらしたものは

南極観測隊に応募したのは、名古屋大学病院で勤務医をしているとき。院内に募集の貼り紙があったんです。趣味で天体写真を撮っていて、この目でオーロラを見たいという夢もあったので、もし参加できたら素晴らしい体験になると思いました。それに加えて、当時は病院という限られた世界での生活や人間関係に少し違和感を感じていました。視野を広げたい、もっといろいろな人たちと触れ合いたい。そんな理由も大きかったですね。

※南極観測隊には2回参加しました。現地では医師として隊員たちの健康管理を行うのが任務。一番怖いのは事故です。観測作業で機械を使うこともあり、隊員には危機意識を持って仕事に臨むよう念押ししていました。私が活躍しないのが何よりです。時間があるときは、ほかの隊員の手伝いをするのもよくありました。南極の水で鹿児島名物の白熊を隊員に振る舞ったこともありますよ。苦労も辛さもありましたが、共に苦楽を分かち合った仲間が日本中に

ます。その時の経験や仲間は、私にとって貴重な財産です。機会があればまた参加したいですね。

来年の5月には鹿児島市で白瀬日本南極探検隊100周年記念に関するイベントを行う予定があるんです。私も隊員OBとしていろいろと協力しています。南極観測隊での体験を伝えることは、私にとって地域医療とともにライフワークの一つとなっています。

地域塾の活動を通じて 感じていることは

これまでに3回、「かごしま子どもリーダー塾」の講師を務めました。昔から人と話すのが苦手だったので、南極へ行ってから人生観がガラリと変わりましたね。経験したことを人に伝えたい、という気持ちが湧いてきたんです。リーダー塾では子どもたちに話を聞いてもらえるのが醍醐味。帰りに引き止められて「どうやったら南極へ行けますか?」と、真つすぐな目で質問されたときは本当にうれしくなりました。

私を含め、多彩なジャンルから講師を招き、バラエティー豊かなカリキュラムで行われるリーダー塾は参加する面白さもあります。普段の生活ではなかなか出会えない人たちの人生に

触れ、文化を学ぶ。私自身も楽しみながら参加しています。私も学生時代にこんな塾を受講できていたら、また違う道があったかもしれませんね。その代わり、これからも多くの子どもたちに思いを伝えていきたいと思っています。子どもたちが私の講話をきつかけに夢を持ち、その夢が実現したことを聞くのが今の夢です。

※宮田さんが参加したのは、第39次平成9年〜11年と第44次平成14年〜16年の南極観測隊。



非常に仲が良かったという隊員たちと、南極大陸をバックに撮影。左から2人目が宮田さん

昭和基地前の広場に撮影。「晴れた夜はオーロラを観察していました」